

そのことがよく示されています。環境問題から心の問題へ、緑蔭図書のテーマとして取り組んでい

ただけると幸いです。

(精神科医)

つながりが見えてくる時

永倉みゆき

小学校に勤めていた時、四年生の子ども達と水をめぐる学習をした事がある。雨が地面に降り川に流れ込み海に至り、また再び蒸発するという循

環の中で、水が、木々を潤し動物を育て、様々に形を変えてあらゆる生命を支えているということ。を改めて知らされた。そしてその同じ水が、私達

の体の中にも流れていると思う時、水道から流れ出てくる何の変哲もない水が、とてもいとおしいものに見えてくるようになったものだ。それは例えばコップの水に「やあ、どこから来たの」と聞きたくなるような、そんな感じだろうか。

実は、世界と自分はつながっていたんだ、ということが実感としてわかると、人は、自分のかけがえのなさも、世界のかげがえのなさも同時にわかってくるように思う。

アラスカに魅せられ、写真を撮り続け、遂にはアラスカに暮らすようになり、撮影中に熊に襲われて亡くなった星野道夫が遺したエッセイを読んでいると、自分の生きている今という地点が、様々なつながりをもって見えてくる。『旅をする木』（文藝春秋）の中に、忙しく東京で働く女性編集者が、一週間だけ彼の旅に同行し、サトウクジラの大群に出会った時のことが書かれている。

「私が東京であわただしく働いている時、その同じ瞬間、もしかするとアラスカの海でクジラが飛び上がっているかもしれない。……」。彼はそれを受けて、〃それを知ったからどうということではないけれど、ぼくたちが

が毎日を生きている同じ瞬間、もうひとつの時間が、確実に、ゆつたりと流れている。日々の暮らしの中で、心の片隅にそのことを意識できるかどうか、それは天と地の差ほど大きい」と書く。そしてその人生観は星野道夫の書くもの、撮す写真の中に形を変えて幾度となく出てくる。私達が、（お昼には何を食べようか）とぼんやり考えている〃今〃という時に、アラスカでは何千年も前か



らそうしてきたように、クジラがジャンプをしているのだろう。ある意味では、私達は、クジラと同じ時間を共有し、同じように生かされている。

日常の中に流れている別の時の流れに、鶴見俊輔は「神話的時間」と名を付けた。この本『神話的時間』（熊本子どもの本研究会）には、幼い子どもとやりとりをして過ごす時に神話的時間が共有されると書かれているが、これは、私自身の保育者という立場から実感として理解できる。

私達は、言葉になる以前の感覚をも持って、現実を生きている。子どもと遊んでいると、そのやりとりの中でその感覚が甦ってくることもある。その感覚は、現実世界の中ではともすると忘れられがちだが、文学を読み解く鍵、聖書を読み解く鍵もおそらくそこにあるのではないかと著者は言う。

神話的時間の世界とつながるきっかけのひとつ

として「不思議」という感覚がある。人は、当り前に見慣れていたものの中に不思議を見出し、魅きつけられるその瞬間、別の世界の流れに気付くことがある。レイチェル・カーソンの『センスオブワンダー』（新潮社）は、そんな体験を美しい言葉で綴った本だ。彼女は言う。ある日の美しい夜空の眺めが、もし一世紀に一回のものであるならば、人は何としても見ようと集まるが、実際には、同じような光景は何十回も見ることができないため、そこに住む人々はその美しさを気にもとめず、いつでも見られるがゆえに、一度も見ることがないのだと。子どもと共に新鮮な目で世界を再発見することで、私達自身の世界を豊かなものにしていきたいと切に思う。

では、どのようにしたら良いのか。子どもと共に世界を見直すなんていう言葉ではよくわからないと言う人には、『小さな自然かんさつ』子ども

と楽しむ身近な自然』(日本自然保護協会編・平凡社)をお薦めする。ここに書かれている、自然と付き合う様々な方法の根底には、人が育つ上で自然との触れ合いは不可欠であるという、きちんとした思想(信念)がある。

セスオブワンダーに衝き動かされた子どもの表情が、見る者の胸に直接伝わってくるのは、この本『さあ森のようちえんへ』(石亀泰郎・ぱるす出版)である。デンマークにある、毎日森に出かけて行つて遊ぶ(森の中にある幼稚園ではなく、森そのものを幼稚園にしている)幼稚園の一年を、写真と文で綴つた本だが、そこに出て来る子どもの表情が輝くばかりに美しく心地良い。かわい、と言うのでは物足りない。人が満ち足りて生きている時の顔とでも言つたら良いのか。森の中で子どもは何をするの? という問いに対し作者は、「のんびりしているよ」または「好き

なことをして遊んでいるよ」と答える。そして「のんびりしている子どもってこんな風だ。つまり特別になにもしていない」と続ける。しかし、何もしていないと見える中で、子ども達がたつぷり不思議や驚きを味わ

い、育っているのが写真から伝わってくる。今の日本の子どもに一番足りないものが、ここにある。保育に携わる人には、ぜひ手にして欲しい一冊である。

豊かな気付きへのもう一つのきっかけに絵本がある。子どものために絵本を読む時、自分で楽しみながら絵本を眺める時、突如、日頃忘れていたもう一つの世界を思い出すことがある。この本



『絵本の森の魔法の果実』（川端強編・童話館）

には、一三九家庭の絵本体験が寄せられている。

それら一つ一つからは、絵本が確実に、遙かなものと現実をつなぐ架け橋になっていることが伝わってくる。遙かなものとは、親の子ども時代の体験であったり、心を動かされた出来事であったり。日頃、日常生活に埋もれて見えなくなっていたものを、呼び醒す力を絵本は持っている。そのことが理屈でなくわかるのが、この本なのである。

最後に紹介する本は、今まで紹介した本と味わいの少し違う本『アンダーグラウンド』（村上春樹・講談社）である。まだ記憶に生々しい「地下鉄サリン事件」の被害者の方に個別にインタビューをしたものを集めた本だが、そこから浮かび上がってくるものは、新聞や雑誌で読んだのとは全く違った、誇張のない事件と普通の人の人生

とのつながりである。この本を読むと、普段自分が聞き流している出来事の下に、どんなに多くの人の人生が存在していたのかを知り、愕然とする。

ものごとを自分と切り離して考えるのと、自分とのつながりの中で捉えるのとは、随分違ってしまう。日常生活で精神までがマンネリ化してしまつた時に、これらの本を読むと、水に「どこから来たの」と問いかけた、あの気持ちが戻ってくる。たつぷりした夏の時間に、一冊の本で、世界を見る目を変えてみたいものだ。

（静岡市立安東幼稚園）